地球　第五卷第四號（聚落研究號）　大正十五年四月一日

人文地理學上より觀たる日本の村落

小川琢治

一、緒言

日本の村落及び都市の成立に關する地理的研究は極めて幼稚である。嘗て小田内通敏氏が大倉發身氏の支持により完成した「帝都と近郊」なる一篇は此の方面に於て最初の纒つた研究の試みであつて、空谷の跫音として迎へた所である。此の小冊子には開路者（パイオニヤ）としての荊棘を排して正道を開くの困難に坐する缺陷はありとしても、その有益なる資料たるはいふまでもなく、更に進んで知らんとする種々の問題が含まるゝに拘はらず、その後此の如き專誌 Monograph の跡を繼ぐものが殆んどない狀態を免れぬのは眞に遺憾に堪へぬ。

本稿は小田内氏の著書を手にした際に想ひ着いた所を書き綴り、石橋博士其他二三の同好の人士に示した後、未定稿として久しく筐底に藏して置いたものである。今之を公にするに當つて、多少

の筆刪を加へたが、大體は舊稿のまゝであるから本卷前の三篇の續きとしては用語文脈の諧調を缺く所が尠くないことを告白せねばならぬ。

今日の日本に於ける居住Habitation狀態の研究は種々の意義を有するもので、農村の將來から見るも都市の現狀から見るも、其の居住狀態の變遷には國民全部の生活問題が含まれて居る。其の改善に對する努力注意が單に現狀のみに限られ、居住の起源、聚落發達の徑路に關する研究が無視されては、如何なる計畫にせよ果して嚴密な科學的正確を期し得るや甚だ危ぶまれねばなるまい。我々のかつて試みた二三の日本農村に關する研究（地學雜誌大正三年第二十六年第三百十二號に載せた「越中國西部の莊宅に就て」及び京都府教育會から出版した「近畿地方の土地と住民」）の繼續として其の後に獲た材料及び其の研究の端緒を茲に述べんとするのは、現今の村落及び都市の研究に於て其歷史的發達が一見極めて緣遠い樣で、而かも之を輕視すれば其成因を不明ならしめ、其構造の差異を說明し得ぬことになるからである。過去の居住狀態の成立と變遷を顧みずして現在及び將來を考察するのは考察法其ものゝ缺陷で、これより生ずる誤謬は許容さる可らざるものと信ずる。

試に村落に於ける氏神に就て考ふるに、是は居住と離す可らざるもので氏子には往々にして近畿地方に見る如き神殿（カウドノ）と稱する祭典を司どる當番があつて、同聚落中の家柄によつて之を擔當し得る

ものと得ざるものとの區別を保存して居る。此の如き氏神に對する村民の關係は祖先傳來のもので越後地方の例では其の村民が他に新地を開墾して移住する場合に、其分社を建てるか、又は祭典の日に原住村民と共に鄕里の氏神に參拜するの習慣もある。

嘗て內務省が村社の合祀を强制せんと試みたのは實に此の如き氏神に對する農村の舊慣を無視し單純に卓上の空想を基礎としたもので、敬神の信念を云爲した目的と全く背馳した有害無益の一大失錯であつた。數百千年來の古木の鬱蒼たりし鎭守の森が此の一片の惡令によつて伐り仆されて、其の或ものが村民の一場の酒食費などに煙消霧散したのは永久に恢復し難き損失であつて、之と同時に數多の聚落成立の記念物は失はれたのである。當時の國體擁護に腐心した內務省當局者が此の誤謬に陷つたのは甚だ不可解に見えるが、其理由は聚落に於ける氏神が如何なる機關として農民の居住に歷史的關係を有するかを知らざる下級行政官吏の輕卒な判斷のみでなくて、高級行政官吏に在つても農村に對する科學的研究を缺いた結果として全く其根本意義を知らざりしによつたのである。

人文地理學に於ける居住卽ち聚落 Siedelung, Etablissement, Settlement の意義は如何。人類の土地占有の必要の第一は雨露寒暑を防ぎ安穩な生活を得る爲めに屋舍を作り住宅を定めることにある。住宅定つて衣食を得る爲めの農耕牧畜の生業が營まれる。故に地と人との關係は居住によつて

固定し、而して居住の仕方には民族により地文的環境により特殊の型式が起つて來る。居住に於て注意さるゝ所の家屋の構造、聚落の形狀、土地の占有及び使用法等の如き要欵は土俗上經濟上農政上等に各相當の意義あるのみならず、人文地理學上には民族の體格容貌習慣等よりも遙かに重大な意義を有するものである。特に居住狀態の差異は地圖上に明瞭に現はれて、人文地理學上の地方的特徵となる。ブリユヌ氏が近頃「人文地理學」に於て特に此の點に多大の考覈を加へたのは、ラツツエルの綜合的方法により創建せるものに免れ難き疎大の缺陷を補綴した功頗る大なるを認めねばならぬ。

今本篇を起草するに當つて著者の最も躊躇するのは自分の觀察の不十分なことゝ、專心一意此の問題に沒頭し得ざる爲めに生ずる必要な智識の貧弱なことであるが、村落にも都市にも今や施設に關して種々の問題が提起されつゝある際であるから、試に揭げて大方の敎を乞はんとするのである。

二、家屋構造の差異と其起原

居住の要素は宅地と田野とを成す家屋と土地とである。是は周禮地官の廛と田とに相當するもので、家屋の構造は住者の生業に從つて異るのである。然れども現今の村落と都市とに於ける家屋の

構造の根本的差異は島國の原始民族と大陸よりの移住民族から成立つた關係から種々の變化を經過して出來たものと想はれる。

農家の構造に於て最も原始的型式の遺存するのは草葺屋根で、其上に神社の松魚木と同形の棟俵が附着して其の構造の起原の古きを示して居る。之を朝鮮の農家に比較するに、其の構造は獨り勾配の彼に在つて遙に緩慢なだけでなく、棟の部分が全く兩側及び兩端に續いた橢圓形の凸起たるに止る點で頗る著しく異つて居る。勾配の差は氣候上雨量の多少により變化することもあらうが、其上部に加へた松魚木の遺制は確實な民族的差異と看做し得る。故に日本農家の家屋構造は古い型式を一部分に殘して居ることは爭はれぬ。然れども內部の房室の排置に至つては支那農家と半島及び日本の農家との間に著しい差異があつて、後の兩者は互に近く前者は全く異つた型式に屬することが認められる。

農家の構造も社殿の型式と同じく區別して種々の型式となし得る。先頃喜田博士の「日本民族と住屋」(雜誌民族と歷史第三、四兩號)に記載されたので、切妻式の眞屋と四阿式の東屋の區別及び之に關する其歷史的事實が明かとなつたが、我々の狹い範圍に於て觀察した所でも、型式の區別を試むるにはなほ此外に注意すべき點が種々ある樣に見える。

東海道の鐵道沿線にては駿遠境界から以東は一般に東屋が普通で、是から以西は喜田博士の東屋

の一種とせられた入母屋が普通である。而して入母屋に於て注意されるのは、棟の兩端が反り上つて居ることで、尾張以西で殊に著しく目に着くのである。此の形狀は馬來諸島土人の切妻式假屋の棟を想ひ出さしむるもので、アイヌ民族の型式たる東屋と起原を異にするものでないかと疑はれる。切妻式で妻入りの眞屋は北陸道の農家に最も普通な型式で、飛驒庄川谷等にもある。喜田博士は眞屋卽ち「ミヤ」で古代に於て高貴の住宅と神社とに限られ、地方の一般平民に許されなかつたものが、奈良朝以後に庶民の住屋にも眞屋を見るに至つたと考へられた。然れども是れも亦た其構造の簡單なこと（喜田博士の第三號表紙に揭げられた合掌家屋）を併せ考へ來れば、原始的農家として造られ得るもので、北陸の農家にのみ後世僭上の意で造り出されたとは受け取れぬ。我々は眞屋を農家の原始的型式の一と看做したい。

神社々殿の型式と同じ樣に農家々屋に型式の種類を區別して其地方的特色を明確に知ることは望ましい。今我々は此の點に就いて多くを語り得ぬのを遺憾とする。が、幸に藤田（元春）文學士の熱心な研究で、最近一道の光明を認め、本號に揭げた同氏の報告にその一端を認め得る。

大陸から輸入された家屋の構造の最も顯著に殘つたのは佛閣と宮殿である。現今の都市に於ける紳士の住宅建築は隋唐文化の影響によつて生じた公卿の住宅から一變した所の武家の住宅建築が基礎となつたものと想はれる。都市の一般の中流以下の住宅は同じく大陸の移住民の影響を受けた筈

ではあるが、其の判然たる證跡を擧げることは困難である。近畿地方の小家屋の街路に面した戸口の側に部の構造の遺物と想はれる所の上げ椽が見られるなどから推測されるのみである。

之を要するに現今存する日本の家屋建築の起原を示すものゝ一は神社で、大社造り其他種々の構造の差異はあつても、島國固有の原始的居住の型式を存するもので、之に對して變化を與へた大陸輸入の家屋構造は寺院に於て其純粹に近き型式を存して居る。

然れども日本の家屋に見る所の椽は支那には全く缺けて居ることは著しい差異である。是は神社建築に既にあるもので朝鮮家屋にもある。故に椽の有無は朝鮮及び日本の家屋を支那建築と區別する一特色といひ得るかも知れぬ。

單に家屋のみを考察して既に原住民族と移住民族との居住の仕方の差異が此の如く明瞭に認められるが、其の宅地及び田野の分配及び村落としての聚合に當つて如何なる差異があつたかは次に之を述べる。

三、莊宅式村落と垣内式村落

日本の神社に見る所の樹木を周圍に繞らして、其内に社殿倉庫を建てた型式は農家の原始的住宅に其儘に保存されたもので、之に近い住宅は現に越中西部の莊宅式農家に今も行はれて居る。東海

道の中尾張一ノ宮附近の村落にも此の如き立木を周らした住宅が頗る多く、或る村落は汽車から望んで森林かと想はれる位である。

家屋の周圍に繞らした樹木の種類は越中尾張美濃に見る所の杉の立木が最も原始的宅地の景相を殘すものと想はれる。然れど東海道線に見る如く其他の濶葉樹を繞らす場合もあり、又た奇麗に刈込んだ槇の生垣を造る參遠地方の農家の如きものもある。

此の如き場合の立木は農家としての定住を示す最も善き目標で、從つて古木あるを誇ることは保守的な農村の美風である。此頃滋賀縣畦上の立木を伐り去らしめた如き新農政の無謀な劃一主義が此に勵行されてはならぬ。

孤立莊宅 Einzelhof の形を成した越中兩礪波郡の地方では此の住宅と其周邊の田地の耕作と密接の聯絡を有し耕作の習慣上一種の莊宅と看做し得るものであることは前に本誌で述べた。然れども此の地方の莊宅なるものは必ずしも原始的型式と速斷し難い事情がある。今此の型式の農村の分布する處は東大寺文書によつて東大寺墾田であつた土地たるは明かで、地勢上神通川の洪涵地であつたのが寺院に與へられて荒蕪地が追々開墾されたのである。故に大井川の洪涵地たる藤枝附近に見る一種の散布式農家と同じ樣に、開墾の爲めに生じた孤立莊宅が氣候の關係で永遠に持續されたものと考へられ得る。

孤立農家の散在が地圖上に著しく見える他の一例は讃岐高松附近の條里制の遺跡判然たる處である。現場に就いて調査した所によれば多く小作人の小家屋ではあるが、此の地方では水害其の他の故障のない限り農民は散布式居住を好むといふことである。故に此の場合を併せ考ふれば日本に莊宅の有無は問題にはならぬ樣で、島國の原始住民が多くの場合に孤立莊宅として居住を起し、種々の型式の村落は其後に形成したとするのは必ずしも空想でなからう。

此の如き散布式村落と形態の全く相反したのは奈良京附近及び諸國の國府所在地附近等に行はるゝ條里制の遺物たる垣內式村落である。嘗て「近畿地方の土地と住民」なる小冊子に記載した如く、此種の村落の密集家屋より成る村落と區別する點は第一に條里制によつて劃定された方格狀の巷衢を成したことであるが、其原始的形狀に溯りて考究するに、最初は略ぼ方形又は長方形に近き輪廓を有するもので、奈良平野では其外を周らすに幅約二歩(十四尺許)の堀を以てし、其四面に各一門(木戸口)を設けたるもので、其內に含まれた戸口は二十戸許であつたと推測さる。其後に第二期の聚落の發展により戸數の增加するに及び更に區劃を設けて堀を周らし、第三期以後は全く任意に宅地を定めたのが判然と追跡され得るものがある。

其最初の戸數約二十五戸なることは說文第十二に閭の字を解して

里門也、从門呂聲、周禮五家爲比、五比爲閭、閭侶也、二十五家相羣侶也、

といふ支那の古村落制と略ぼ似た制度である。隋書食貨志によれば、此の田里制度は北朝に行はれたことが明かで、後周武帝の保定二年(五六二年、欽明天皇二十三年)に

頒新令制、人五家爲保、保有長、保五爲閭、閭四爲族、皆有正、畿外置里正、比閭正黨長、比族正、以相檢察焉、

といふ記事がある。

此の型式の村落は近畿地方で村の一聚落を垣内(カイト)と呼ぶ語源を説明する最も雄辯な實例で、垣内卽ち閭内である。故に我々は之と垣内(カイト)式村落として區別する。

近江東部の能登川附近にて踏査した條里遺跡の村落では、聚合の形狀は之と全く同一なるも、堀及び木戸の有無は不明であつた。河内攝津等にては平野鄕その他の如く堀の遺跡の認めらるゝものが少くない處から考ふれば、多分條里制の完全に實施された五畿内には村落までも一定のプランに從ひ起されたのであらう。奈良平野の二萬分一地形圖を披けば、此の型式の村落が條里制と密接の關係あるもので奈良京の長安帝都に倣ひ恭仁(クニ)京の洛陽に倣つた如く當時の支那村落制に倣ふものと直に看取し得る。

抑支那に於ける村落に障壁を周らし關を設けて朝夕開閉するの習慣は非常に古く、管子乘馬篇に

分國以爲五鄕、分鄕以爲五州、州爲之長、分州以爲十里、里爲之尉、分里以爲十游、游爲之宗

十家爲什、五家爲伍、什伍皆有長焉、築障塞匿、一道路、博出入、審閭閈、愼筦鍵、筦藏於里尉、置閭有司、以時開閉、閭有司觀出入者、以復於里尉、

といふので障壁を築き里門を設ける事が春秋時代に既に山東地方に一般に行はれたことは知れる。今山東の村落の稍大なものに大抵土壁を周らし里門を設けたのを見るのは二千餘年以來の村落構造の舊觀を存するものとして面白い。此の障壁の築造はメソポタミア平野の都市國City-Kingdomsに於けると同じく、黃河平野の住民にも必要で、戎狄の襲來に對する防禦の爲めに缺く可らざるものであつたのは勿論であらう。

然れども日本の第七八世紀間に飛鳥奈良の諸朝の實施した村落の制度は直に大陸に於ける舊制其ものを襲用したのでなくて、隋唐間に行はれた所に範を取つたのである。隋の高祖の開皇三年（五八三年）に突厥吐谷渾が邊塞の地を犯したので、

於河西、勒百姓、立堡營田、

との令を下し、又た煬帝の大業十一年（六一五年）二月の紀事に

庚午、詔民悉城居、田隨近給郡縣、驛亭村塢皆築城（資治通鑑卷百八十二、隋紀六）

の文が見え、當時盜賊天下に蜂起し都鄙共に物騷となつた結果前に掲げた後周保定二年の村落制度の行はれた地方に於いて村里の築障を勵行せしめたのである。此の詔勅の發せられたのは本邦推古

天皇の二十三年卽ち聖德太子攝政の時代で、恰かも犬上御田鍬等の隋より還つた年であるから、條里を設け班田を行ふに當つて當時大陸に行はれた築障法をも忠實に摸倣したと解せられる。

同じく條里の遺跡歷然と見える讃岐高松附近の孤立莊宅式村落の現存する事實は一見此の論斷と抵觸する如きも、此の地方の如く中央政府から遠く離れた所では、條里班田の實施が村落の改造までに細目を悉さなんだものと考へられる、近江に於ける民家聚合の型式が奈良平野の場合と同一で、堀の存在せぬものは恰かも此の兩者の中間に位すると看做され得るから、條里制の遺跡に見る村落に築障塹濠を設けた純然たる垣內式村落から種々の階段を以て極めて原始的な居住狀態まであつたとすべき事實は倍明かとなる譯である。

垣內式村落に於ける農家の隘衢を作つて密集した居住は一般の聚合村落に於ける農家の住宅と著しい對照を呈して居る。孤立莊宅式の農家宅地に見る立木は全く之を植ゑる餘地なく又た脊戶に果樹園蔬菜圃を設けることも出來ぬ。唯都市の宅地と異るは米麥の收穫に必要な庭を有するのみである。此の如き農家の生活は毛詩小雅の「中田有廬」といひ、宅都邑に在り、外野に田し、農時に出でゝ田に就き、農人田中に於て廬を作り、以て其田事に便にすといふ、支那古代の住宅地を、田野と無關係に置いたのを其儘摸寫した形である。幸に村落間の距離は數百米で住宅から田地に行く距離が近いので大なる不便なく廬を田中に置く必要も少い。

此の型式の農村は原と一定の人口に耕地を分配したのであつて、奈良附近の如き處では其後一千三百年間に增殖して來た人口の過剩に對して村落其ものゝ未耕地開墾其他の方法による調攝作用は行はれる餘地を持たぬから、從つて他の未開地方に移住した形跡がある。藤田文學士の鄕里たる丹波山奥の鶴岡などは鎌倉時代に此の平野から出て開墾した一例で、日本全國に蔓延した近江商人の發源地が同じく垣內式村落の發達した地方なるのは他の一例である。故に此の如き地方では人口密度の飽和狀態が約千年間繼續し來つたのである。

又た此の如き耕地過少、勞力過多と牛馬飼養に必要な牧草の缺乏と相伴ひ、家畜を有するもの非常に少く、農家に厩のないのが普通である。高松附近の如きは耕作季に入れば山越しに阿波から貸牛が入り込み、小農は共同にて賃借し終れば穀物を載せて吉野川溪谷の地方へ還つて行く處がある。是はバミルやアルプスの牧地に移動する畜群と全く性質目的の異つた家畜移動の面白い例である。

古く開けた此の種の農村と田畑の外に山林原野湖河を有し薪炭牧草魚介を自給し得る途ある他の型式の農村との間には歷史的發達の過程を異にすると共に農村經濟上非常に大なる差異のあることが認められる。

今茲に擧げた第二種の型式は從來獨逸居住地理學者の命名した街村Strassendorf圓村Runddorf叢聚村 Haufendorf 林隙村 Waldhufendorf 堀端村 Marschendorf 等の如き中歐及び西歐で與へられた

型式上の分類を其儘に適用し難い日本特有の居住型式である。若し之に獨逸式の名稱を與へるならば門の語源を有する「小路村」Gassendorf とすべきである。而して此の型式の特に面白い點は大陸文化が古代日本の農民に與へた影響の意外に深く且つ大で、其の造り出した農村構造は千年以上も化石の如く保存されたことである。明治時代に實施した西洋文化の影響たる耕地整理は恐らくは將來の農民生活に此の如き大なる變化を與へまい。

四、洪涵地に於ける村落の發達

日本の農村の居住狀態に於て歷史的見地から最も古くて、而かも型式上互に著しい區別があり、又た各異つた起原を有し、此の兩種の村落に比して成立の時代が遙かに新らしく、而かも形態上兩者の中間に位するものが處々に認められる。是は孤立莊宅から叢聚村落に轉化する漸移形を示す一種の散布村落である。此の型式の居住は上野赤城山の南麓に於て足利前橋間の鐵道沿線に著しく現はれ、特に二萬分一大胡駒形兩圖幅(前橋及高崎近傍)に明瞭に描かれて居る。

此場合では農家は廣き脊戸を有する宅地を有し、全く孤立したものから二三四五位の聚落を作つて孤立し、或は此の如き聚落の二三四五が相連接して叢聚村落に近き形態を成すものである。下田(禮佐)文學士の報知によれば此等居住の歷史は遠きも戰國時代に止り、前に見た奈良平安兩朝の間

に出來たものよりは遙かに新らしい。大抵一部落同姓で共同の墓地を有し、其後に入り込んだ越後からの移住者は劣等視されて、其墓地には葬らしめぬといふことである。

之と類似したもので更に新らしい時代の居住と想はるゝは大井川の下流金谷の北から島田藤枝の近傍に至る間の平坦な洪涵平原に發達したものである。二萬分一青島島田兩圖幅に描かれた此の居住は一戸乃至數戸の落葉樹で圍まれた農家から成立つて錯落たること星宿の加く、或は連續し或は孤立すること棊局の如くなつて散布して居る。此等の村落には新田とか島とか洲といふ地名の多いので其の新開地たることは容易に知れる。

此の平地の南なる大井川に臨んだ臺地には純然たる孤立農家から出來た初倉村の如き處がある。是は一層新らしい起原の居住らしく、之と類似の未開原野を開墾して田畑を拓きつゝある地方には處々此の如き間隔の大なる孤立農家を見る。近畿地方でも明石の臺地の如き處には同じ型式の孤立農家がある東海道の新期第三紀層の產地の間に廣い谿谷を作つて流れる諸河の洪涵地には此の如き新田多く、天龍川の二俣見附間には殊に著しく、又た其臺地の上は三方原の如く殆ど全く居住のない大原野を成して居る。

然れども此の如き場合では開墾の半途に在るもので、未だ其の安定狀態には入つて居らぬから、越中若くは讃岐の平野に見るものゝ如く、之を孤立莊宅として數へることを躊躇する。

抑日本に於ける耕地の開墾と農村の發達とを現在の狀況より判斷しては、往々にして大なる誤謬に陷るのである。我々の越中國東部に就いて和名抄の鄕名に當る現在の村落を考定せんと試みた結果によれば、舊鄕の地點は射水小矢都兩河間の洪涵低地を避けて、大抵山間の掌大の耕地ある處、山腹から低地に移る處及び河谷の低地に開く處に在ることを發見した。從つて吉田東伍氏の地名辭書に考定した鄕名所在地は山間の舊村落から移住した出村に相當するものが認められた。茲に述べた大井川に於ける新田開墾と同じ過程は越中の東大寺領に於て早く行はれたのであるが、多くの場合には水害を防ぐ築堤及び大規模の灌漑水道を要せぬ處に最も古き農村が發達して居ることは注意に値する事實である。

石橋博士は近畿地方の古い聚落が洪水を避けて高處を擇んで出來たことに注意されたが、その後に和名抄の鄕名の現存する村落を追跡して、生駒山塊の東斜面などで小谿谷の平地に流出する谿口村として區別すべきものが頗る多いことが知れた。此の如き小なる扇狀冲積地の發達する處には溪流を引いてこの緩斜面に灌漑するの容易なると舊大和川の低地に起る洪水の危險なきとの二因子が與つてその成立を促したのである。京都の東北に當る白河一乘寺修學院等の村落の位置も全く之と同じく、生駒白河共に花崗岩土砂の流出により著しい扇狀冲積地の發達したもので、地質上の要件を一にするのも面白い地文關係である。

此の如き村落は大抵耕地面積に乏しく、後世の農村經濟から觀れば一鄕の單位として狹小に過ぐるが如きも、是は平安朝に於ける郡國の經濟の如何に小規模なりしかを窺ふ一班として視ねばならぬ。

五、村落に於ける氏神と寺院

日本村落に必ず有る神社は所謂氏神で、其の最も古いものは延喜式に列擧されたものゝ如く、天孫降臨前から日本の土地にあつたものがある。其中には春日明神の如く强大な氏族の祖先として宏壯な神社を成したものもあれば、同じく古い起源を持ちながら、僅かに一部落の氏神に止つて終に最近に併合の悲運に遇ひ、其氏子の部落から移轉した樣なものも又たは遠き以前に氏子と共に移轉しものも少くなからう。此の如き神々の中で最も著しい例は紀伊國の伊太祈曾神社の如く、國の一ノ宮たる位置を讓つて古く移轉した場合である。

大陸移住民族と共に傳來した神では山城の稻荷平野松尾の如きは賀茂其他の國神の間に割り込んで次第に發展した。然れども其の外來者たる地位は稻荷の如く伏見に氏子を持たず、其鎭座の土地は其以前からの氏神たる藤ノ森神社の氏子として今日まで續いたので明かなものがある。

村落に就いて之を觀るに垣內には必ず神社があつて、其の氏子が他に新に居住する時には其分社

を建てる。若し比較的に近い處であれば之を建てずに原住地の神社を氏神とする場合もある。其祭神は往々式内神社のある處でも、他の遙に新らしい天神とか山王とか八幡といふ樣な一般信仰の深いものが氏神となつて居る。是から見れば氏神なるものは極めて古い地方固有の國神を祖先として祭たものよりも、或る村落が出來た初めに何れかの神社から分體請來したものが多いのは勿論である。故に日本の居住と氏神との關係にはフエニシア希臘諸民族が地中海の各地に植民するに當つて到る處に鄕里の神の廟を起したのと類似點が認められる。

寺院は佛敎の傳播と共に追々に廣まつたのであるから、氏神の如く村落の成立と直接の關係がないかと想はれる。河内の國府の遺跡の北に在る船橋には小部落なるに拘らず、氏神の社殿と棟を並べて兩部神道時代の遺物たる寺院の現存するが、是は殆ど例外ともいふべきである。察するに是は原と名の如く渡場村落として古く出來た重要な村落であつた爲めに、寺院までも興されたのであらう。一般に言へば寺院は數多の垣内に共通に各宗のものが處々にあつて、其の各の信徒が垣内に無關係に信奉して居る。前に述べた下田文學士の語られた關東平野北部に於ける同姓の居住者のみが共同の墓地に葬り他の新入者を除外する習慣の如きは、近畿に於ける神殿たる資格ある家と然らざるものとを區別する習慣に類似するものである。是れは關東の開墾が近畿よりも後れて、佛敎の大に民衆化した時代に及んで行はれた爲めで、或は村落としての形成の際に氏神よりも或る宗派の信

仰の方がより重大な關係を持て居たかとの疑がある。故に村落組織の要素として寺院がどれだけの意義があるか十分に考究して見たい。特に關東の如き大陸文化の影響の普及が晩い處で此點に注意して居住研究を進めて見たい。

六、漁村と山村

環境の居住に及ぼす影響は著しいが、其中でも狹い沿岸及び孤島の漁村と窮谷の山村卽ち柳田君の所謂「山島」の村落とは共通なる日本民族の原始的居住狀態及び風俗習慣を保存するものとして研究の面白味を持つて居る。奄美大島や八丈島は各特有の產物たる織物で兒女子にまで知られる外に、體格言語風俗等に孤立により古代日本民族の面目を彷彿せしむるものがある。

古い能の面に表現された婦人の顏面が屢此等の島嶼の婦人に見られるのは、純粹な日本人の容貌の型式として面白く感ぜられる。又た互に離れた兩島の婦人の頭髮の著しく長いことも一特性で、內地の不自然な髷を結ふ習慣によつて永い間に此の日本人固有の體質の變化した以前を想像し、繪卷に現はれた婦人と今日の婦人の差異を驚駭せしめる。分娩を不淨として隔離する神代の傳說も亦た其儘此の如き島嶼に習慣として今に存するのみならず、若狹の漁村の如き京都に近い處にも今尙ほ見らるゝのである。此の習慣によつて生ずる一の居住上の特色は、產假屋を建て村落から隔離し

て建て、又た月經ある婦人を隔離する習慣のある處もあつて、其の爲めに毎月約一週間づゝ一部落の婦人が離居する合宿假屋を設けた處がある。

日本民族が他の文化民族よりも淸潔を好むことは著しく、魏書倭人傳に「已葬、擧家詣水中澡浴、以如練沐」といふ風俗の記事によりても今の日本人の頻繁に沐浴する習慣の淵源の遠さを想はしめ今述べた如き現在の漁村の婦人が假屋から出る時必ず海中に浴して家に歸る習慣あることから推せば獨り葬の穢を水に澡浴して淨めたのみでなかつたことを知るに足るのである。

漁村に此の如く日本民族の不淨を嫌忌する舊慣を純粹の形のまゝ今日に傳へ來つたのは、交通の比較的に少くして外界の影響による變化を被らぬことが之を保護する重な理由の一である。然れども他の理由は危險な海上生活を營む社會に不淨に觸れた爲めに海神の罰を被るといふ恐怖心が迷信として最も永く續く爲めである。

漁村に於ける舊慣の保存と同樣なるは山村で、近年に至るまで其の生活狀態に變化なく、從つて飛驒莊川谷の如く奈良朝頃の家族制度が其儘保存されて家長が絕對の權力を有する孤立莊宅の最も完全な形狀を維持して居る處がある。其の家屋構造も亦たアルプス山中のシャレーに類似した二階家であつて、山間の住宅として環境の支配を受けたことが明かではあるが、而かも其構造が其儘越中の莊宅式村落に繰返されて居ることは面白い。我々は此點からも莊宅式居住が日本民族の原始的

居住であつたことを推定し得ると信ずる。

是に由て之を觀れば日本に於ける居住地理學の研究には此等の漁村及び山村に於て其の原始的風俗習慣の餘喘を索めねばならぬ。歴史的發達を注意するものには此等の場合は見逃がすことの出來ぬ好材料である。

現今は漁村及び山村の經濟上の變化の急激に行はれつゝある時機である。發動機船トロール船等が漁業に使用されて陸上交通の不便なりし遠隔の海岸島嶼と都市との間の物資の運搬が自由となり從つて水産物の價値が高まると共に生活狀態は面目を改めた。之に劣らぬ變化は山村にも起つて居る。從來運搬の途のなかつた爲めに有價の木材で窮谷に腐朽すべかりしものが、水車仕掛の鋸によつて板として搬出されるので深山に於ける森林の一部に限られた利用が一般的に普及し得る樣になつた。又た山村の住民の手では山林經營の十分に出來難いのが資本家が植林費を放資することになつて、山村民は土地を貸し勞役に服する農村の小作と異つた一種の資本と勞力との關係を生じた。此等の生活の變化が將來の漁村及び山村を一變することは疑を容れぬ。故に單に研究者の立場から考へて調査の時機を失へば將來は舊慣を追跡することが今よりも困難となるべきである。

漁村の居住狀態が地圖上に現はれて面白いのはその海岸線の變遷に伴ふ移動である。東海道では富士愛鷹兩火山の裾野の沿岸に鈴川から沼津に至る間の沿岸卽ち今の東海道鐵道本線を通ずる新ら

しい村落と浮嶋沼を隔てた裾野の邊緣に山を負ふた村落との對照は頗る著しく、後者は全く海に對する聯絡を失つた農村で、前者に漁村の景相を認める。此の場合は本邦交通の幹線で、重な大聚落は室町時代以後に發達した驛站の形狀を成すを以て、漁村としてのみ成立つたのでなく、從つて純然たる漁村の特色を失つてるものも少からぬ。

是よりも顯著なのは房總半島の東岸九十九里濱の沿岸漁村である。此の海岸には關東平野の高臺の崖下から現今の海岸に至る間に五乃至十粁の平地が發達し、交通線は一之宮から茂原大網東金成東横之町八日市場(福岡町)成田(旭町)飯岡の小市街を連結した道路で、之に沿ひ鐵道も敷設されてゐる。而して此の古い聚落の發達した位置から海岸線が次第に移動して現在の如く離れたので、漁獵を生業とする住民の聚落も次第に崖下から遠く離れ、海岸線に並走する數列の小村落となり、道路も亦た海岸に縱走するものと之を横ぎるものとの網目を成すは地圖を一瞥するものゝ注意する所である。この海濱に出來た聚落は某濱某納屋と呼び、之より一粁内外を隔てた奥の聚落の名を冠するもの多く、母村から前進した漁場が新たな聚落に發達する徑路が實に明瞭に現はれてゐる。

利根河口の銚子港以北でも此の如く前進した漁場の形跡を認め得るも、聚落の規則正しい發達は明瞭でない。是は北方の海岸に砂丘の發達が迅速に進み、且つ高い砂丘が頻繁に移動するといふ自然力が安定した居住を困難ならしめる結果と想はれる。

九十九里濱と腹背の位置にある東京灣に面した西岸は太平洋岸の如き潮流の作用が働かぬから、養老川及び小櫃川の河口三角洲の發達に伴ひ海岸線の變化が起る局部に限つて漁村の移動が起つたに止る。

七、驛站河津湖津及び海津の發達

古代から戰國までの間に起つた居住の中で交通の關係から生じたものがある。是は德川幕府時代に至つて更に發達して現今の都市となつたものもあれば、交通路の變化によつて衰微して村落として殘つてるものもある。蓋し陸上の交通線路は或る部分だけ變らぬ處がある外は平安朝から戰國まで、と德川幕府以後と著しく變つた處が多い。此の變化を考へねば古代街道に驛站として起つた居住を認め難い。其一例は奈良京都間街道中の長池木津間で今の木津川に沿ふた平坦な大道は全く新らしく、今の鐵道に沿ふた山手の村落相望んで連續した道路の方が古代の交通路であつたので此等の居住が出來たのである。阪神間の交通線も高槻から西ノ宮の北の廣田に至り是から今の鐵道線路の北を山麓に沿ふて生田神社に達するものが古い街道らしく今日の最も人烟稠密な海岸の都邑は多くは武庫山塊から盛んに流出する花崗岩砂の堆積によつて生じた新地に漁村として居住が起つたらしい。從來の居住が山手と海岸との中間に空地を殘して判然たる二帶を成すのは此の關係を指示する

事實である。兵庫以東の海岸で古い港として發達した居住は廣田の南に在る西ノ宮で、其後に今津が出來たことは神社及び地名から直に推知される。

此の如き變化が現今鐵道の布設によつて新らしい停車場の設置と共に變化する以前に行はれ來つたのであるから、交通によつて生じた居住は前に述べた如き耕作其他の土地其ものに固着した生業に伴ふ居住に比して遙かに急激の變化が起り、又た從つて古代より現今に至る間に經た變遷も多い筈である。古代に此の如くして出來た都邑でも交通上の意義が消滅又たは減少すれば衰微して單純な農村に沈落する外はない。之に反して數多の交通路の交叉點として地勢上から時代の變遷の影響を被らぬ處は次第に發展して都邑となる。

此の交通の關係の一定不變な著しい場合の一は山間に於ける村落に屢見る所の落合又は河合といふ地名で、是は大抵兩溪谷の合流に在つて交通線の分岐點に當るものである。又た此の如き地點は美濃根尾谷の市場の名にて推知される如き農民の物資集散地となつたものもある。其の交通の意義が局部的に限られずして一郡一國の要點たるものに至つては大都邑に發達するのである。

平地に於ける交通の停止點は河流を横る處で渡場を意味する英國のフヨードFord（獨逸のフルトFurt）橋を意味するブリッヂBridge（ブルック、ブリユッケンBruck, Bricken）佛國のポンPont等の地名が常に路の河を横る處に在つて、其重要なるものが都邑たる如く日本の地名にも稀に渡とい

ふ地名があり、又た厩橋本船橋古橋等の地名があつて其居住起原の意義の明瞭な例がある。其最も著しく且つ歴史的に面白いのは男山八幡の山下に在る橋本であつて、久しく渡船のみで淀川を渡して居る處に此名があるのは土佐日記に見えた古の山崎橋の名殘りを地名に止めたものである。又た此の如き古驛站の橋梁所在地が大河の山間から平地に出る河幅尚ほ狹くて流れの緩い處に擇まれたことも著しい事實で、瀨多宇治山崎皆な其例である。古い道路が阪ある山手を通過して平地を避けたのも同じ理由で、治水の行はれぬ時代に騎馬及び步行による交通のみ行はれた頃には流路不定の平地よりも其の確乎たる河道のある部分を擇んだものであらう。此等の點は何れも河に沿ふた居住の發達變遷を考ふるに當り注意すべきである。

湖津及び海津として發達した居住は古今を通じて經濟的意義最も重大で、其或るものは交通線路及び交通機關の變化と共に衰滅し去つたのもあるが、多くは繼續して發達を遂げて居る。中世以後の琵琶湖濱の要津は瀨戸內海沿岸の諸津よりも一層狹い範圍に於て行はれた水運に伴ひ發達した居住として面白い研究問題である。其盛衰の變遷は例妻船の名を演劇の舞臺に留めた筑摩の如く、全く湖津として消失したものがあり、又た鹽津海津堅田の如く湖村として著しく舊觀を追想せしめるものもある。今此等の地方を觀て面白い特性を認めるのは湖村なる一型式が沿湖の居住に行はれることである。其最好の一例は琵琶湖東岸の伊庭村で、地圖上には縱橫に交叉した河（といふよりは

渠）を通じたブエニス市街に彷彿たる形相を示してゐる。湖面と村落地面との高度の差の少い爲めに、此等の溝に架した橋は何れも高い石垣を橋の兩端に築いて、橋下の小艇の航行を便にした點などもブエニスに似通ふ外觀である。唯その異る點はブエニスに在つては交通機關は殆んど全くゴンドラのみなるに反し、此處では廣濶なる湖岸に接した村落に過ぎぬので、人家と溝との間に道路を殘し、溝は運搬機關に利用さるゝに止り、交通に必要な道路と並用されてることである。

此の他現在急激な變化の起りつゝあるのは海岸の避暑及び避寒に適する部分で、農漁等の生業と無關係に新らしい村落が發達する事實が大に注意すべき一例ではあるが、今茲に一々此の如き點を枚擧する暇がない。

村落の成立に關する考察は姑く此だけにて打ち切り、次篇に於て都市の成立に就いて述べる。

北米合衆國の聚落について

中目覺

私は常に聚落の根本原理を研究して見たいと思ふて居るが、その遑がないのは遺憾である。聚落の根本原理には第一に物質方面第二に精神方面の研究が必要と思ふが、今日までは多く物質方面の